

キヲクノカケラ

「母さんと僕」

最初に病気のことを知ったのは、小学校一年のとき。
母さんが、知っておいたほうがいいよと教えてくれた。

まだ、小学一年と若かったが、母さんが、わかりやすくおしえてくれたので、遺伝子の病気というものを、理解できた。

確か、こんな感じだった。

体を作る部品が壊れていて、みんなと違っている。

そうか、おれの部品がおかしんだ。だから病気なんだと、納得した。

小学校一年になるまえ、僕は、託児所にかよっていた。

よく、いじめられていた。

なぐられたり、遊び道具をとられたり。

僕は歩けなく、ほとんどの時間を木の椅子にすわっているだけだった。

病気のために、いじめられているんだと感じていた。

ある日の夜。

心の中で考えていると、ねむれなくなった。

母さんは、いつも、僕が寝入ったのを確認したあとで、布団に入っている。

僕が、よなかまで、ねむれずに起きていると、なんでねむらないの？

と、声をかけてきた。

いじめられていることは伝えなかったが、「なんでこんな病気なの？と尋ねた。

あなたと、母さんに、神様があたえた試練なんだよ、とゆっくりと静かに、教えてくれた。

「こんな試練、ないとだめ？」

「この試練があることで、この家族は、より強くなれる。そうやって神様があたえてくれたもの。」

その言葉を聞いたあと、安心したのだろう。。

僕は、ねむれない夜から開放された。

今思うと、その時、母さんは、泣いてなかったが、目が赤かったと思う。

ずーっと、責任をかんじているような、言いかただったとおもう。

中学生になったあるとき。

母さんと、テレビをみていると、遺伝子診断の番組をやっていた。

これまでに、聞けなかったことを母さんに尋ねてみた。

「ねえ、母さん。。前に、僕が、なんで病気なの？と聞いたときに、母さんは、神様が与えた試練だって」

そうやって説明してくれたよね。

なぜ？

母さんは、「あなたの病気が、わかったときから、ずーっと考えていたから、すぐに答える

ことができた」と話してくれた。

「もし、生まれるときに、遺伝子診断をして、病気であることがわかっていたら。」

「それでも、ぼくを産んでいた？」と、思い切って、聞いてみた。

僕が、その質問を言い終わる前に、母さんは、

「産むよ」と。。。はっきりと、前を向いて答えてくれた。

僕は泣きそうになった。

僕は、父の顔をしばらくは知らなかった。

僕が生まれる前に離婚したからだ。

当時の父さんは、日頃から、酒に酔っては、暴力を振るっていた。

母さんは、日ごろから、まだ、おなかにいた僕と、姉をかばっていたらしい。

日増しに多くなる暴力に、自分でも制御できない父さんと話した結果、離婚になったそうだ。

ある偶然から、それまで、連絡を取り合っていなかった、母さんと父さんが出会った。

またもう一度、やり直さないか？と、相談されたそうだ。

母さんは、僕らに尋ねた。

姉は、嫌との即答の返答。

僕は、一緒に暮らしてみたいと。

そのように答えた。。

母さんは、その場で、声を上げて、泣きじゃくった。

はじめて目の当たりにした、母さんの本気で泣いている姿を。

「ただ、守りたかっただけなのに。」

しばらく、母さんは、泣きどおしだった。。